

## 日本語諸方言における「ラ行五段化」の総合的研究

宮岡, 大

<https://hdl.handle.net/2324/7182262>

---

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 宮岡 大

論 文 名 : 日本語諸方言における「ラ行五段化」の総合的研究

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、以下の 3 点である。

- (I) 日本語諸方言で生じる「ラ行五段化」現象について、各方言における「ラ行五段化」形式と、それが生じる条件を記述する (第 3 章～第 12 章)。
- (II) 「ラ行五段化」形式に生じる /r/ について、それが形態構造におけるどこに位置しているかを、共時的・通方言的・通時的に分析する (第 13 章～第 15 章)。
- (III) 「ラ行五段化」が生じる動詞語根・接辞の条件について、共時的・通方言的・通時的に分析する (第 16 章～第 18 章)。

「ラ行五段化」は、日本語諸方言 (東北・東海・北陸・近畿・雲伯・中四国・九州) においてみられる、動詞形態論における現象である。

表. 宮崎県椎葉村方言の動詞語形 (筆者データ)

	語根	非過去	否定非過去	過去
r	togir- 「削る」	<i>togiru</i>	<i>togiran</i>	<i>togitta</i>
i	mi(r)- 「見る」	<i>miru</i>	<i><u>miran</u></i> <i>min</i>	<i>mita</i>
e/u	hute/hutu- 「捨てる」	<i>huturu</i>	<i>huten</i>	<i>huteta</i>

「ラ行五段化」現象は、通時的には、否定非過去形 *miran* にみられる、母音 (i/e) 終わりの動詞語根が子音 r 終わりに変化する現象であるとされてきた。共時的には、母音 (i/e) 終わりの動詞語根が子音 r 語根と同様の形態論的振る舞いをする現象を指す。

本論文は、3 部構成になっている。第 I 部 (第 3 章～第 12 章) では、「ラ行五段化」がみられる方言のうち、以下の方言について、動詞形態論を筆者調査データによって記述する。すな

わち、第3章で山形県庄内（酒田市）方言、第4章で富山県呉東（富山市）方言、第5章で岐阜県東濃東部（恵那市）方言、第6章で大阪府泉州（岸和田市）方言、第7章で和歌山県紀中奥地（日高川町旧美山村）方言、第8章で島根県出雲（出雲市）方言、第9章で瀬戸内海島嶼部（広島県江田島市）方言、第10章で宮崎県日向北部（椎葉村）方言、第11章で熊本県天草（天草市）方言、第12章で鹿児島県薩摩（いちき串木野市）方言である。この記述において、特に着目する点が2点ある。1点目は、「ラ行五段化」形式の形態構造である。特に、「ラ行五段化」の/r/が動詞語根末に含まれるか接辞初頭に含まれるかを記述する。2点目は、各方言において「ラ行五段化」が生じる条件である。動詞語根末母音・動詞語根モーラ数・後続する接辞の3点に着目して、各方言で「ラ行五段化」が生じる条件を網羅的に記述する。

第II部・第III部では、第I部の記述や先行研究データを用いて分析する。第II部（第13章～第15章）において分析する観点は、「ラ行五段化」形式に生じる/r/である。最初に第13章で、「ラ行五段化」が生じる各方言において、「ラ行五段化」形式の/r/が動詞語根末に属するか接辞初頭に含まれるかを論じる。ここで、「ラ行五段化」形式における/r/の所在は、方言によって異なることを示す。加えて、/r/が動詞語根末に含まれる方言と、接辞初頭に含まれる方言には、それぞれ共通点があることを論じる。更に、その共通点は理論的に解釈可能であることを示す。次に第14章で、この共時的な/r/の所在から、「ラ行五段化」という通時的变化について、/r/が動詞語根末に生じる変化なのか、/r/が接辞初頭に生じる変化なのかを方言ごとに論じる。最後に第15章で、このような変化がどうして生じるのかを説明する。

第III部（第16章～第18章）では、「ラ行五段化」が生じる動詞語根・接辞の条件を分析する。最初に第16章で、共時的な条件の方言間バリエーションを論じる。「ラ行五段化」が生じる共時的な条件（動詞語根末母音・動詞語根モーラ数・後続する接辞）は、方言ごとに異なる。本論文では、「ラ行五段化」形式の形態構造を区別しながら、「ラ行五段化」が生じる共時的な条件を各方言のデータに基づいて階層によって通方言的に一般化する。次に第17章で、「ラ行五段化」が生じる条件の通時的变化過程を論じる。「ラ行五段化」は全ての母音終わりの動詞語根や全ての接辞が後続するときに生じるとは限らない。このことから、「ラ行五段化」は一度で完了する訳ではなく、徐々に生じる動詞語根や接辞が広がっていくことが予測される。本論文では、「ラ行五段化」の通時的变化過程を、筆者の一次データと先行研究の二次データをもとに分析する。その際、「ラ行五段化」が生じる共時的な条件の通方言的一般化を用いて、この一般化から予測される順に進行していると考えて矛盾しないことを示す。最後に第18章で、「ラ行五段化」が生じる条件の通方言的一般化がどうして成立するのか、動詞語形の頻度という観点からその動機を説明する。

最後に第19章で、本論文で明らかにしたことをまとめ、本論文で扱っていない残された課題を述べる。